
かくて呪い子は世界を嘲笑する

tohu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かくて呪い子は世界を嘲笑する

【Nコード】

N0621G

【作者名】

t o h u

【あらすじ】

彼らは決して悲観しない。自分たちに平穏が訪れないことを。彼らは決して目を逸らさない。非情な現実があっても。彼らは決して誤らない。自分たちは、もう人ではないことを。

一章：プロローグ

一年半前までは勉強というやつを舐めきっていたせいか、それから先は必死という言葉がよく似合うぐらいに精を尽くす破目となった。元々俺は要領が悪く、更に今までの時間の差を簡単に埋められるような天才的な頭脳は持ち合わせていなかったのだ。

そんな俺が、魂が磨り減るぐらいまで頑張った結果、どうにか無事近くの公立高校へと進学できた。

万々歳だね。自画自賛したさ。私立なんかに行くと破滅的に授業料が高いからな。

なぜ、健全無垢な少年である俺が金の心配などするのか、と訊かれれば痛いところである。

一人暮らしなのだ。無論、金に困る単独生活。

親も兄弟も親族すらない。まるっきりなオンリーライフというわけだ。

うっはうは、というわけだ。………嘘。本当は物凄く辛い。

身元引受人の名前欄なんて、俺が住んでるアパートの大家さんの名前書きしまったんだぜ。もちろん許可は取ったけど苦笑いされたな。まあ別にいいさ。その分スクールライフを十分に楽しめば良い。

高校生になったとて別にこれといって何の感慨も無いが、とりあえずは無事卒業を入学前から祈っておこう。俺の周りで災厄が起こりませんようにとな。

と、ぼんやりと考えてるうちに校門が十歩程度先に見えてきた。それと同時に俺と同じ新入生もチラホラと姿を見せ始める。

妙に数が少ないと思ったが、時間的には余裕とは言えないので殆どはもう体育館に入っているのか。

確か知らされた予定としては、まず中庭に配置しているホワイトボードに張ってあるクラス表とやらを確認してから体育館で入学式だったはずだ。体育館は校門から中庭を突っ切った先にあるから、配

置としては丁度良いのかも知れない。

俺は迷わず中庭に向かう。そしてぽんと置かれたボードを見つけた。その前にはまだ自分の名前を探しているのか、数人が群れていた。

とりあえず、俺もその群れの一部となる。

さて、名前を探そう。

クラス順に右から、出席番号順に上からずらりと漢字の群れが並んでいる。出席番号は苗字の頭文字が早い順かららしいので、俺の場合は全て診る必要は無く、上を探していけば良い。

「お、あつたあつた」

あがつきこうき

二組の最上に赤月功季という名を、ものの数秒で見つけることが出来た。

しかし、あつけない。もつとこう、ときどき感があっても良いはずだ。

だがまあ、時間はもう少しあるのでまだボードを眺めていよう。

クラスメートの名前ぐらい知っておいても損は無いだろうさ。その前に顔すら知らないわけだが。

名前を流し目で確認する。

シンプルな名前、変わった名前、なんて読むのか分からない感じの名前と色々あつたが、最後の漢字列だけが俺の鼓動を跳ねさせた。

くつぎゆきて

久継倅杜。何の変哲も無い名前。

目頭を押さえる。そしてゴロゴリと揉み解す。少量の涙が出てきたところで目を擦って改めて確認する。

見間違え、という期待した物はそこには存在しなかった。

ははは、何であいつの名前がこんな所に書いてあるんだよ。落書きでもしていったのか？ と軽く現実逃避を試みた。

ゾクリ、と。悪寒でも身震いでもなく、背中が震えた。

噂をすれば影が差す、とまでは言わないが、このタイミングで来るとは何とも奴らしいと思えた。

俺は振り向く、少量の溜息を落として。

期待通り、じゃなくて予想通り、奴はそこに居た。

「…よう」と俺が言えば。

「…やあ」と奴が言い返す。「驚いたね」と後に続けて。俺もさ。笑みも驚いた様子もなく、無表情に限りなく近い表情で俺を観察するが如くじつと視線を当てていた。先に目を逸らしたのは俺だ。男と見詰め合う趣味は無い。

逸らした先は学生服。しっかりと着込んでいる学生服のボタンは、正真正銘この学校の物だった。つまり、こいつがこの学校の生徒と言う明確な証となる。

止めてくれよ。マジで。

「久しぶりだな。一年半か」

そう言ったのは俺だ。とりあえず社交辞令として挨拶。そんな俺の言葉に、変わらぬ姿勢、格好、表情で首だけを動かす。横の方向に「違う。一年と五ヶ月と二十三日だ」

人の言葉に同意と肯定をしたがらない無意味な性根はご健在のようだった。それぐらいなら一年半って言って差し支えないんだよ。と言いそうになって止めた。そんな言葉よりもっと適切な一言があるだろう。

「会いたくなかったぜ」

「奇遇だな。僕もだ」

互いに苦笑するしかなかった。

入学式は予定狂わず、新入生の期待と不安と緊張を同時に乗せ静かに開始された。

これからの学園生活を想像しているのか、はたまた早く終わってくれと面倒くさい思考をしているのかは謎だが、催眠能力に特化した校長の長話に面白味を見出す事ができず、右から左に流す顔つきが殆どだった。

それは、まあ当たり前だ。何を楽しみに、春の訪れと共に、から始める事前にあったマニユアルを自己アレンジしたような演説を真剣に聞かんとならんのか。そんな事に時間を潰すくらいなら、これからの学園生活を勝手に桃色に染め上げて脳内で嬉はずかし騒ぎ立てた方が何倍も有意義である。みたいな下らない事を考えていないと、いつスリープボイスが俺の耳から進入して脳内を冒すか分からんからしているだけだ。俺に妄想癖は無い。

とかそんな内に、存在するだけで肺が締め付けられるような息苦しい入学式を終え、あてがわれたクラスへと移動する事となった。

途中、例の奴の後姿を視界に納めてしまったが、この際無視しよう。関わらなければきつと俺は幸せになれる筈だぜ。

とか思ってたのに。

「ああ、ヤバイ。今日の俺はヤバイ。超胸糞悪い。出鼻を挫かれた気分っつーか厄日か？」

「まったく最悪だね。神様の存在を信じなくなるよ。邪神とかだけど」

あてがわれた席が隣同士という事実は、流石に神の悪戯以上の悪意を感じる。これはもうクリスチャンから僧に宗教替えしなくちゃならんな。……嘘だ。どっちもゴメンだ。

とりあえず溜息の付き所は、俺はまたいつくるか分からん席替えの日までこいつと毎日顔を合わせなきゃならんという事だ。

俺の胃、もつか？

「如何してかは知らないんだけど、君の顔を何故か僕は直視できない。コミュニケーションが取り辛いから焼却するか爆破するかで、親しみやすい顔面になってから僕の前に現れてくれないか？」

「そんなの、この指をてめえの目にぶち込めば即解決だ。その前にお前の存在は人道的な問題でこの世に害を及ぼす。一度閻魔に人生について説教されてから生きるべきじゃないのか」

久しぶりに行った意味も感情も宿らない侮蔑のやり取り。

相変わらず何も変わってないことを確認したのだが、それを嬉しい

とも悲しいとも表現できず、ああいつって確かにこういう奴だったなあ、と記憶と現状を一致させるのが精々だった。

「つーか、何でお前が地元じゃないこの高校に入学してるんだ？ 認めたくは無いが、お前の学力ならもつと上の高校に進学できただろうに」

「勉強が全てじゃないよ。確かにこの学校に特別魅力があるわけじゃないけど、僕にはそれなりの事情があるんだ。君こそ、脳の代わりに豆腐を詰め込んでくるくせに、よくこの学校に進学できたね。訳ありか？」

「いつの時代も金は人の選択肢を削り取るんだよ。私立は金かかるし、ここ以外の公立も電車使わねえと行けねえからな。定期券代も馬鹿にならん」

「そういう、貧乏臭い台詞を吐くなよ。君の哀れな部分はオツムだけで十分だ。それ以上あるなら猿に幸せについてアドバイスでも貰って来たらどうだい？」

「勝手に不幸と決め付けるな。俺は日夜働いて、そうしてお前より何段も早く大人の階段を上っているんだよ。そして更に俺は真つ当な人生を――」

その先は止めた。願っても訪れない願望は、惨敗した奴の負け惜しみぐらいにみつともない。俺は無い物ねだりはしない主義なんだ。それでも祈る事ぐらいは許されてほしい。まあ、祈りを捧げたところで、こいつが出てきた時点で当の昔に終わっているんだが。

「……？」

ふと、視線を感じて見渡してみると、クラスメートほぼ全員が俺を見つめている。おいおい、照れるじゃねえか。という冗談はさておき。何だ？

「おい」

「何だよ？」

「君の番だぞ」

何が？ と口が先走る前に脳内でほんと手を打つ。そうだ、今はホ

ームルームの時間を使って生徒の自己紹介をしている最中だった。見れば教壇に立つ教師が早くしろよ、とアイコンタクトしている。やれやれ、倅杜との会話で精神エネルギーを使い切ってしまったのか、緊張も申し訳なさも沸かない。

適当に自分のプロフィールを語った後、プラスαで好きな食べ物でも言えば良いか。きっと新たな交友関係も絶望的だな。別に良いさ。心中で面倒くさいと語る俺の心はもはや、学園生活の理想絵をびりびりに破って焼却炉に放り込んでいる真っ最中だった。どうにでもなれ。

一章：皮肉な時間

広いなあ。と俺は思った。

体験入学もろくにせず、に立地条件と公立だからという理由で学校を選んだので、入学式当日は受験日を合わせて学校に訪れたのが二回目となる。

ロングホームルームは自己紹介して時間を潰していたわけだが、何故だか中途半端に時間が余ってしまい、学校を見て回れと担任教師からのたまったので不承不承だが今後の為にも、と面倒くさげに歩き回る事となった。

そしてもう一度言う。広いぜ。

総生徒数が少なく、校舎も大三つ小一つしかないくせにグラウンドと敷地が他の学校と比べても明らかに逸脱した広さを有していた。

野球グラウンド一つ、サッカーグラウンド一つ、ソフトボールグラウンド一つ、多目的グラウンド一つ。人数との割合が常識的にずれまくっている、そんなにグラウンド造るなら生徒増やせよと思わなくもない。

訊けば多目的グラウンドが殆ど使われなく荒れ放題らしい。俺が校長だったら一般開校して学校の認知度を上げる政策に取りこむな。もちろん有料だが。

まあそんな事はともかく、こんな広大な土地を歩き回っても別に意味は無いので早急に足を休めたい所なのだが、ところがどっこい。今の俺は単独行動ではなく、集団行動中なので身勝手な思いは慎む事となっている。

別にガイドさんが学校案内してくれてるわけじゃないぜ。これまた担任教師が各々の班で行動するようにと仰ったからだ。

ちなみに、班員の決め方はクラスの席を適当に八等分しただけであり、という事は俺の真近くだった倅杜も俺と同じ班員という事で、「このドでかい桜の木の下には死体が埋まっている気がする。その

栄養おかげで満開なはずだ。そして次の栄養の役割を担うのは倅杜になると良いな。つーかなれ」

「相変わらず君の頭蓋骨には味噌汁も作れないほど利用価値の無いクソ味噌が詰っている様だね。早急に廃棄処分することをかなり真面目にお勧めしておくよ」

俺達はお馴染みの軽口を暇つぶしの娯楽として最低に交わしていた。飽きもせずよくもまあやるものだ和我ながら自嘲してみたりする。それでも口が条件反射じみて止まってはくれないのだが。

「なあ倅杜。思えば人には無駄が多すぎる。きつと地球環境が崩壊の線路を走っているのも人間が生み出す無駄のせいだと俺は思う。よって死ね倅杜。お前こそ人類史上最高の無駄だ」

「世界が誤って生み出した害虫がほざかないでくれ。君が吐き出す息や体臭があまりの悪臭のせいで、全世界の人間がどれだけ被害を被っているかをいい加減気付いたらどうなんだ？」

「蛆虫に脳を十割食われて死ね。お前の喉から発せられる特殊音波は俺の美しくも切ない思い出を着実に壊している。お前がああ世のチケツトを手に入れられる事を切に期待してる」

「それはどうも。君の場合、あまりの不味さに蛆虫も脳を食べる事を諦めるだろうから、そのまま腐って異臭が漂い始めて、その臭いで自分自身で悶え苦しみ死ぬがいいよ」

再開までに一年半だというのに、お互いに毒の吐き方が衰えるどころか逆に切れが増えてきたような気さえする。

その当時なら俺と倅杜の仲が犬猿の更に上を行くトラとゴリラである事は周りに既知されていたのでこのままお互いに精根尽き果てるまで練りに練った罵倒を繰り返すのだが、今は違う。時の流れというか、状況の変化というか、今日が初対面だというのにこの高度な口先戦に無理矢理捻り入ってくる勇者が存在していたのであった。

「ちよつとその馬鹿二人組み！ 仲が悪いのか馬が合わないのかどうかは知らないけど、そんな馬鹿なことばかり言っていると私達の気分が悪くなるって事ぐらい分らないの、この馬鹿共が！」

一つの会話文に馬鹿が三つという高度な罵倒の仕方は、俺も見習うべきところがあるなと無理矢理にでも思うことにした。

というか馬鹿二人組って。俺とこいつが同じ土俵で数えられている事にかなり不快な思いをした。

隣を見れば、苦々しい顔をさらけ出している倅杜が目映る。きつと心境は俺と似たり寄ったりなのだろう。

そして俺も似たような顔をしているはずだ。

前に向き直る。

目の前に現在進行形で憤怒している髪を三つ編みにした少女と、その後で悪漢でも見るような脅えた姿勢を保つ少女がいる。実に残念な事ながら、俺と倅杜と同じ班員になった二人だ。そしてこの二人に対して何故か申し訳なさが出てくる。

「誰？」

ついさつき存在に気付いたと言わんばかりに怪訝な顔をする倅杜。

自己紹介ぐらい聞いておけよ。

しかし、親切心溢れる俺は律儀に説明する。

「級長だ。前の学校で史上最高の級長として名を馳せた伝説のお方なんだ。見てみるあの容姿。あのお方ほど級長というなが相応しい人は居ないし、級長という名はあのお方のために作られたようなものだ。よって尊敬と羨望を持って級長と呼ぶが言い」

倅杜が級長を凝視すると、何処か納得したように頷く。そうか、お前も分かるか。

「すまん。級長。こいつを脳内で惨殺する事が俺の娯楽だとしても、流石にやりすぎたようだ」

「ごめん級長。猿相手に躍起になるなんて僕も大人気無かったよ。どうか怒りを静めて」

俺が素直に頭を下げると、後にくるように倅杜も謝罪の言葉を述べる。

そして俺達が誠心誠意を込めて謝罪したというのに、目の前の三つ編み少女は頬を真っ赤に染め、立腹の様子であった。

「あ、アンタねえ——」

「して級長。高校になってもやはり級長に——」
「なるか！ ていうか級長級長言うな！ 私には三根真野みねまやっていうちゃんとした名前があるのよ！ 級長とか勝手なネーミング付けるな！」

「おやおや、そうなのかい？ 俺はてつきり級長だと勝手に確信してたぜ。」

なにせ彼女は、三つ編み、額が広い、眼鏡、勝気な正確、成績優秀（入学式に学年代表で挨拶をしていたから間違いない）というのが特徴だからな。これらの素質と容姿から級長となるのは彼女しか居ないと踏んだのだが。そうか、違うのか。

三根が地団駄を踏み出す。もしかしたら相当気にしてるのかもしれない。

「だいたい赤月！ 私はずーっと前からそう言ってるわよね、級長と呼ぶなって？ 何で高校生になってもそれを引っ張り出してくるのよ？」

「脅迫概念というやつだ。俺は何故か級長を級長と呼ばなければいけない気がするんだよ」

「そんな概念は捨てろ！ 隣の久継君もね！ と、に、か、く！ 学校内では陰湿な口喧嘩はしないで！ それがダメならせめて私達の目の前に居る時だけでも仲の良いフリをしろなさい！ それ以外なら刃物振り回そうが何しようが構わないから」

俺達は苦渋の声を喉から捻り出しながらお互いの目を見合わせる。

アイコンタクト開始。

『出来るか？』

『数十秒で円形脱毛症になりそうだね』

『なら却下の方で』

『同意しよう』

二秒で結論に至った。

「無理」

「何でそこだけ心が通じたようにハモるのよ！」

三根の視線段々と殺意に近づいているような気がするのには勘違いであってほしい。このまま彼女が暴走すれば流石に勘違いだけではすまないだろうが、倅杜と表面上だけとはいえ仲良くするなんて死んでもゴメンだね。という訳で、俺は何と言われようと死を選ぶ。冗談だから笑ってくれて構わないぜ。

さて、そろそろ仲介人でも登場してくれないかなと思いついた場合だ。そいつは来た。いや、来たわけじゃなくて初めからそこに居たのだが、今になって話しに加わってきたのだ。

「真野ちゃん。も、もう良いんじゃないかな？ ほら、二人とも本気で毛嫌いしてる感じじゃないし、どっちかって言うとなりが良さそうだよ」

三根の後ろからオドオドと慎ましく諭すように声を掛ける少女。確か名前は篠川茜しのがわあかねといったか？ まあそんな事はどうでもいい。

俺と倅杜の仲が良いだと？ 聞き捨てならねえな。

俺達の間に関心なんて虫の糞ほどもねえし、友情なんて尚更だ。

あるのはいつ寝首を掻いてやろうかという思惑と、こいつの存在は認められないという意地だけだ。そこに情が入る余地など一切無い。強いて言うなら腐れ縁ぐらいだぜ。

俺が、いや、俺達がそう思っていると、真野が口を尖らせながらも何処か納得した表情で頷く。

「まあ確かに、喧嘩するほど仲が良いって言葉もあるぐらいだしね」
思わず胃液が逆流しそうだ。

そんな言葉は俺の辞書には載ってねえよ。載ってたとしてもとつくに破いて捨ててるぜ。

首を捻る。倅杜と目が合った。

その眼は生理的と精神的に最悪だと訴えていた。その眼に反射する俺の目も然り。

他人に勘違いされる事とはいえ、お互いに仲良ささんだと思われるのはなかなかの苦痛だ。近くに手ごろなサイズの石が有ったら迷わ

ず振り上げていただろうな。

そして授業の終わりを知らしめるチャイムがおもむろに鳴り始め、そしてそれはこの集団から解放されるという事を意味していた。安堵と余裕が生まれたのは俺だけじゃない。隣の倅杜もそうだ。

その後に委員長こと三根真野と篠川茜は俺達を尻目に急ぎ足で教室へと帰還して行った。三根はすれ違う瞬間に「今度、怒らせたら確実に殺す」と視線に乗せて俺を睨み付けた。多少差異があるかもしれないが多分意味的には妥当なところだろう。

俺は肩を竦め、彼女達の後を追うような形で歩き始めた。

「なあ、功季」

隣を歩く倅杜が訝しげた様子で俺に不可解な心境を問うてきた。

「僕達は互いに口論をしていただけなのに、どうして彼女が介入してきたんだ？ 気に障るような単語とか出てきたのか？」

本気で解らないという口調。俺はとりあえず頭を振っておいた。

「お前の鼻穴から出る不快音を我慢できなかつたんだろ？」

正直、詳しくは俺も知らない。他人の心が読める力なんて持っていないので、適当にそう返事をする事が俺の限界だったんだ。

期待通り。倅杜は不快そうに眉を寄せてくれた。

一章：異変の発芽

やたら先行きの不安を感じさせる思いをした入学式はさておき、二週間も経てば段々とだが高校生活とやらにも慣れ始め、クラスも馴染みとなる頃合だったろう。

そんな中で俺は相変わらず欠伸混じりに疲労して重々しい瞼を懸命に開いて、黄昏寸前な状態で黒板を凝視していた。

……眠い。

部活動に所属せず、六時限目終了後に三秒で帰宅準備を開始する俺だが、日々の睡眠は四時間程度という極めて時間に追い詰められた生活をしていた。

何故かと訊かれれば、お前らとは違うんだと答えたい。

俺は働く学生。空き時間は全て稼ぐ事に費やされる。少しオーバーワーク気味だが、それも仕方ない事だろう。そこまでしないとすぐに昼食抜きの日を送る事となる。いや、冗談じゃない。

まあ、そんな事はどうでもいいか。閑話休題だ。

この日はちよつとした珍しい事があった。いつも遅刻寸前間一髪の時刻に教室に飛び込む俺で、今日も別段いつも通りの習慣を行ったのだが、飛び込んだ教室の景色の一部、というか倅杜の姿が見当たらなかった。

便所にも行っているのかと思いきや、朝のショートホームルームの時間帯になつても姿を現さなかった。そのまま一時限目が行われ、終わり。只今二時限目の数学の真っ最中なのだ。

今もなお俺の隣の席が空いている。まあ、居ないなら居ないで無駄に神経を削らないですむので、このまま学校を止めるという話に飛躍したとしても別に困った事はない。

っーか消える。音速で。

とか思っていると、教師の丁寧な説明を遮るようにガラガラガラと教室後方のドアが無遠慮に開いた。無論、生徒と加えて教師の視線

がそちらに向く。

俺も視線だけ動かすと、倅杜が相変わらずの無表情で佇んでいた。遅刻した事や授業を中断した事に対して何の申し訳なさもないような足取りで、自分の席を目指し腰を落ち着かせた。

数学教師は一瞬だけ眉を寄せたが、一つ咳払いして注意の一つも発せず、何事も無かったかのような態度で授業を続行させた。反発を恐れる気が弱い性格だなと俺は推測する。

それはさておき。

「やけに遅かったな。アスファルトがお前に上を歩く事を許可しなかったのか？」

「僕は自転車通学だから歩く必要はないよ」

鞆から教材を引きずり出す倅杜に冷たく切り捨てられた。

だがその反応にどことなく疲労感が浮き出ているのを俺は薄く感じ取った。無論、俺が食い付かないはずがない。

「何してたんだ？」

俺は好奇心に従い、婉曲な表現など用いず率直に尋ねた。

その後に返される言葉は「君には関係ない」に類似したものだと思っていたが、その予想は幾何見当違いだったようだ。

倅杜は蝶が羽ばたくような薄っぺらな振動を空気に与える溜息をつき、俺にしか聞こえない小声を響かせた。

「町中を走り回ってたよ。遅刻したのはそのためだ」

「何でまた。夢遊病か？」

「それは君の持病だろ？」

何なんだその意味深な発言は？ 俺はそんな持病もって無い、はずだ。記憶に自信が無いのは多分気のせいだろう。

「君、僕が今住んでいる所を知ってるか？」

倅杜が何の前置きも無しにそう問いかけてきた。

記憶を巡る、確か………思い出せない。

どこかで聞いた覚えはあるような気がするのだが、今まで自分のことで精一杯だったせい、別れてからも特に関心に向ける事は無く

そのままおぼろげなものとなってしまうらしい。そういえば倅杜だけじゃなく、他の奴らの所在もまったく知らない。今頃あいつらは何処で何している事やら。

「知らないようだね」

俺の思考の長さに、倅杜が呆れも失望も無くそう呟く。まるで最初から分かっていたかのような口振り。その後倅杜は「中央橋を渡った隣町に住んでいるんだよ」と付け足した。重要性は極低ランクの情報だ。正直いらない。

「で、それが何なんだ？」

「僕の町で今何が起こっているか知ってるだろ」

疑問符すら付かない。知っていて当たり前だと言わんばかりの口調。全然まったく知らんと即答する事に抵抗が生まれた。ここでそれを言う俺はバカです、と告白しているようなものだと思ったからだ。こいつにバカにされるのは俺の人生で最も避けなければならない道だ。ム力つくから。

「知らないのか？ 真正のバカか？」

バカにされた。心臓が沸点ギリギリで押し止まる。でも凶星だから何もいえないので無言を貫く。

「君はバカ親に育てられた箱入り娘か？ どうやったら隣近所の町の異変すら知ることの無い生活を送る事ができるんだ？ テレビも新聞も話題に取り上げたぞ」

「テレビは見る暇無い。ついで新聞なんて読んだこともない。自分のことに精一杯の俺は周りを気にする余裕は無いんだ」

今度はあからさまに呆れたような溜息を零す倅杜。知らなくても人間は生きていけるんだよ、という幼稚な反論はしない。無知は罪じゃない、なんて俺は心の片隅にも思っていないからだ。つまり、この場合は俺の方に責がある。でもム力つく。

「十六人」

「は？」

「今までに行方不明になった人間の数だ。その町限定でね」

約一年前かららしい。一ヶ月に一人、偶に二人の割合で町から人が行方不明になつてゐるそう。加害者が居るかどうかは不明だが、とにかく被害者に共通点は無く、十代から四十代まで幅広く行方を暗ましているらしい。警察は奮闘しているようだがそれでも一つの成果も現れない。行方不明者を見たという人も数人居るが、最終的に発見できない。まるでキツネに化かされたようだと溢した人も居たという。神隠し、と住人はそう呼んでいるらしい。

「それがお前とどう関係してくるんだ？」

「昨日、十六人目の行方不明者が出た」

「それで？」

「僕はそれを調べている」

「………は？」

俺の頭は疑問符で溢れかえつた。

何を調べてるつて？ 決まっている。人が行方不明になる原因と、もしくはその本人の行方をだ。

何故？ 正義の心に目覚めたとか。いやいや、それは地球が回らなくなるよりありえない。倅杜は例えこのクラスの半数が行き成り消え去ろうと平然と授業を受けるぐらい、俺とは別の意味で周りに無関心な奴だ。倅杜が行動する原理と言えば、頼まれたか、必要性を感じたか、自分に害を及ぼす、または不利益をもたらすためのどれかだ。間違つても感情論で自分を動かすようなエネルギー溢れる精神はしていないはずだ。断言しても良い。絶対していない。

「お前を引き取った所は探偵家業でもしてるのか？」

「なんで？」

「消去法でその結論に至つた。お前が自主的にそんな事するのは生物学的に証明できない」

「うるさい、と言いたところだけど。まあ粗方合つてるよ。母さんから強制的にやらされてるだけだからね」

やっぱりか、と納得するより、倅杜の母さんという言葉が理解できなかった。倅杜の親はとつくの昔に天に召されている。つまり義母

なのだが。一体どこの賢母様がこんな捻くれ野郎を子供にしたんだ？

「母さんって、お前を引き取った人か？」

「そう。出会い頭に母と呼ぶ事を義務付けられたよ。そう呼ばないと食事にピーマンが生で出される。ちなみに、残す事は不可だ」

倅杜が珍しく、生ピーマンでも食べたかのような苦い顔つきになる。経験済みなのだろう。こいつの私生活にほんの少しだけ興味が湧いてくる。なかなか大変そうだ。

「で、一晩中走り回った挙句の成果はどうなんだ？」

少し脱線した話を修正する。

倅杜は頭を横に振ることで否定の意味を示した。

「全然無い。自分の足で稼げるのはあてがある場所だけだと思い知らされたよ」

つまり徒労か。ご苦労なことだ。

俺は一つ大きな欠伸をすることでこの話題を打ち切った。

それにしても、神隠し、か。そんな事が身近で起こっていたなんて思いもしていなかった。噂の断片すらも耳に届いてこなかったぜ。

だが待てよ。それは本当に世間一般的な事件なのか？ 倅杜が係わっている時点でその可能性はゼロに近いんじゃないのか？

疑念の槍が俺の脳を貫く。

気になって仕方が無かったが、それを本人に訊いて確かめようとは露の一滴ほども思わなかった。

これ以上むやみやたらに詮索すると面倒くさい事に巻き込まれるぞ、と俺の経験が警告を発してきたからだ。

俺は自制心をフル活動して余計な領域に踏み込まないように専念した。

好奇心は猫をも殺すってな。

薄っすらとまどろんでいるといったの間にか全ての授業が終了し、教室内の生徒も部活に行く者やそのまま帰宅する者などそれぞれ別行動を取っていた。

俺は小一時間に及ぶ椅子の束縛を抜け出た解放感に思わず背伸びをした。さて、そろそろ帰るか。

「功季。君は今日暇か？」

鞆を肩に下げ、まだ人が残っている教室の敷居を跨ごうとした瞬間に、突然倅杜から背中越しに声を掛けられた。朝の会話から一言も交えなかった俺達だったはずだが、どうして今になって尋ねてくるんだ？

俺は眉の間に皺を作った。

「なわけねえだろ。俺の生活スケジュールを一から学んで出直して来い」

面倒くさかったので、そうぶっきら棒にに答えた。

倅杜は微動だにせず、そのまま自分の時間が停止してしまったかのように数秒だけ化石になっていた。その後におもむるだが口を動かした。一言。

「バイトか？」

「ああ、そうだよ」

「何の？」

何だ？ なぜこいつは俺のバイト先を知ろうとしてるんだ？ これはまさかの話だが、俺が働いている所にこいつが客として現れて俺が懸命に働いている場面を嘲笑おうって魂胆か？ いやいや、倅杜と言えど流石にそれは無いだろ。

教えるつもりは更々ねえが、やんわり断っておこう。と俺は独りでにうなずいた。

「倅杜、日本人の美点は相手の気持ちを自ら察する所だ。そしてお前も和の国の住人なら俺の言いたい事も分かるだろ。余計な事を訊くな、つーかさっさと帰れクソ虫」

「君ってあれだな。偶に心の枷が緩む時があるけど、かなりウザイ

ね。友達全て失くすよ?」

倅杜は珍獣でも見るかのような視線で、ああ元からいないか、と一人で納得して一息つく。

「ただ僕は君の現状を把握しろと頼まれたただけだ。そうじゃない限り、君の私生活なんて蟻の存在理由ほどに興味は無い」

「なら誰に頼まれたんだよ?」

「母さんだ」

またその言葉を聞いた。今日はこれで二回目だな。

「お前って意外とマザコンなのか? 朝にも似たような事を聞いたぞ。それより、なんでお前の母親が俺のバイト先を知ろうとしてんだ?」

「僕に訊くなよ。本人に直接訊いてくれ」

倅杜が疲労を溜息に乘せて吐き出す。その母親に苦勞させられている事がありありと見て取れる態度だった。どうやら倅杜も面倒くさい所に引き取られたようだ。その点で言うと、俺はまだ楽な方だと言える。

「なら、確りとした理由を聞き出してこい。そうじゃないと俺は答える気はないぞ」

その一言で倅杜は予想通りだと言わんばかりにもう一度盛大な溜息をつく。諦めたととっていいだろうか。

「分かった。尋ねたら適当にはぐらかされたと伝えてとくよ。ついでに理由も聞いておくから、その時は正直に答えてくれよ」

気力の籠もっていない口調でそう促す。答えるかどうかはその時の気分と返答次第だからなんとも言えない。

俺は肩を竦めるといふ曖昧な返事を動作で示して、静かに教室を出る。

「功季、急性過勞死になるぐらいにバイトに励んでくれ。心の底から応援している」

「倅杜こそ、あまり母親ばかりに構っていると、結婚した際に嫁姑バトルが勃発するぜ」

最後をバカな軽口で締めるのは、なんとも俺達らしかった。

一章：呪いの健在（前書き）

ちよつと長めです。

一章：呪いの健在

俺のアルバイト先は『スコール』という街中の点在する喫茶店である。若干古ぼけた外装であり、これと言って眼を引くような物も無いので、殆どの者が関心を向けずに素通りしていくような、正直に言えば何処にでもある平坦な喫茶店であった。

それでも意外と歴史は古い。今の店長の祖父の時代から続いているらしく、それ故に地元の常連客も少なくは無い。

営業時間は午前八時から午後十時まで。喫茶店にしては微長時間営業だが、俺の場合午後からしかシフトが組めないものでありがたい事なのだ。

「すまんなあ赤月。風邪で来れなかった奴の分とはいえ、残業までさせちまってな」

この『スコール』の店長こと、杉岡正和はすぎおかまさかずご自慢の顎鬚を撫でながら社交辞令じみた謝罪を俺に述べてきた。

現在の時刻、十時二十三分。俺は皿洗いに勤しんでいた。

「別に良いって。残業代さえ上乘せしてくれれば俺の口から文句は出ねえよ」

店内をしんみりとさせる様なクラシックをBGMに、カチャカチャと皿どうしが小突きあう音が効果音として空気に色を染める。

『スコール』の内装は一言で言えば古めかしいデザインで、何処となく落ち着いた雰囲気醸し出している。

その一つと言えるのが、全てが木で装飾されたテーブルと椅子である。家具職人が丹精込めて造ったような優美な形であり、年台物と思わせるような傷もそれを助長している。

この店内は落ち着いた雰囲気と表現できる。少し暗めに落とされたクリーム色の照明や、薄桃色の装飾品などがそんな気分になぜされるのだ。

この淡い空間はさながら大人向けだと、俺は常々思う。

「もう、赤月君。子供の内からそんな事言つてたら、大人になった時にケチな人になるよ」

妙に子供っぽい声が俺を嗜めた。失礼。相手は二つほど年上だ。

杉岡桃子。^{すぎおかとうこ}名前のとおりこの店の長の一人娘であり、立場的には俺の上司となる。実年齢的に高校三年のはずだが、その容姿からは中学生としか判断できない。

彼女はテーブルを布で拭きながら、こっちを凝視していた。

「ケチで上等。俺はいつか、このケチさでギネスブックに載る男だからな」

「ああ言えばこう言う。それは人の話を真面目に聞いてない証拠だよ」

語尾に「めっ」と付けてもまったく違和感無さそうなスイートな口調。

子供が大人ぶった言い方をしているようにしか聞こえない。と本人を目の前に言いそうになつて素早く喉で塞き止めた。言えば憤怒を散らすのでいう必要は無い。

倅杜と再会してから咄嗟に浮かぶ会話文が皮肉ばかりになつていくような気がする。このままでは俺のコミュニケーション能力が最低の部類に入ってしまう。妙な危機感を感じているよな、俺。

俺は自分でも知らず知らずのうちに溜息を出していた。それを知つた原因は桃子が溜息に反応したからである。

「あ、また溜息付いてる。最近多いね。幸せが逃げるよー」

「さいですか」

語尾にめっが——以下略。

それにしても今まで俺に自覚できるような幸福があったか？ という疑念がふつふつと沸き起こってくるが、それは後回しにしてもさして問題はないな。

さておいて、

「おい、その中年。アンタさっきから何やってんだ？」

俺の憤怒を込めた視線の先には、足を組んで優雅に紅茶を飲みなが

ら新聞紙を開いている店長の姿があつた。

そいつは活字を目で追う事を止めずに答える。

「ん？ 新聞を読んでいるが？」

「いけしゃあしゃあと云つてんじゃねえよ。そんな暇が有るならこつちを手伝えよ」

「ほう、十六人目か。隣も大変だな」

わざとらしい事を言いながら明確な無視をされたので、今日の残業代は倍額支払ってもらおうという決意を腹の底で固める。

「お父さん、何が十六人なの？」

桃子が全てのテーブルを拭き終え、店長の呟きを話題にする。

店長は顔面に広げた新聞を下ろして、神妙な表情で「ほら、神隠し」とだけ言う。

それで伝わった桃子は合点がいったようで、それについての感想を述べた。

「怖いねー」

言葉の割に口調にはさほどの真剣みは伝わらない。本当は恐がつてねえだろ、と言いたくなるが、それも仕方のないことだと思う。

彼女達は被害者でもその身内でもない。事件に対して何の関係も無い彼女達にとっては、それがたとえ隣の事件でも、遠い異国の出来事のように実感が薄いものなのだろう。

そう思うと、この町にそれをどれだけ重く受け止めている人間がいるのだろうか。統計でも測ってみたいね。

「赤月君はどう思う？」

「は？」

「ほら、行方不明者のことだよ」

カウンターから身を乗り出して、桃子は俺の顔を覗き込む。

いや、今はそんな事より、このしつこい汚れを皿から除去したいんだが。

そんな俺の心情を知つてか知らずか、ねえねえと催促しだす。ここで無視する訳にもいかないだろ。

仕方なく、俺は手を動かすと同時に口も働かせる事にした。

「まず質問の意味がよく分からない。どう、とはいったい如何いうことだ？」

「だから、何で急に人が居なくなるんだと思うってこと」

「知らん。そういう事は誘拐犯に直接訊いてみるよ」

半ば投げやりにそう答えると、桃子は意表を突かれたと言わんばかりに目を丸くして俺をマジマジと見ていた。一体なんだ？

俺の顔に世紀の発見でもするつもりなのか、数秒ガンガンと観察した後、ゆっくりと問いかける。

「何で誘拐って分かるの？」

至極真面目に言っているようで思わず溜息を出してしまう。神隠しとか、キツネが化けたとか、本気で信じているのかこの童顔娘は。

「こんなに連続して人が行方不明になれば、人為的な原因によるものとか考えられないだろ。神隠しとか世間が騒いでいるが、俺からしてみれば馬鹿馬鹿しいの一言しかない」

「でもさ、仮に誘拐犯の仕業として、こんなに大勢の人を攫ってたら流石に足が付いちやうんじゃない？」

「どうだろうな。犯人は複数でよほど手際が良いのか、それとも警察が低能の集まりなのか。まあどちらにせよ、被害者はもう海外に飛ばされているか、はたまた土の下かもしれないな」

「うわーお、恐いねー」

「警察が誘拐事件つてのを公にしないのは確証を持ってないつてのもあるだろうが、実際は神隠しって得体の知れないものにしとけば何の成果も上げられない自分達の低能さを誤魔化せると思ったからじゃないのか」

「そうなの？」

「感だけだな。ついでに、さっきの恐がり方じゃ男の庇護欲は誘えないぞ」

「きゃーー恐いよーー赤月くーーん！」

「演技としても冗談としても、低レベル過ぎる」

俺は手元の作業に集中する。店長も桃子も食器洗いを手伝おうという発想は湧かないようで、こちらに手を回そうとしない。店長は新聞を静かに黙読中。桃子はカウンターに座って俺の動作を観察している。本来なら三人程度でこなす仕事を一人がかりでやっているため更に時間がかかりそうだ。

「ねえ、赤月君って彼女とか居るの？」

話題が大きくズレた。男子には無い女子特有の会話方法だ。この事により俺は男女の差を実感しながら手元から視線を上げ、何故か微笑む桃子の顔を見た。質問の意図が分からない。

「何で行き成りそんな話題になるんだ？　というか、いると思ってるのか？」

「全然ない」

「じゃあ訊くなよ」

「つくろうとは思わないの？」

「いらん」

「どうして？」

「金掛かるから」

俺は自分の食い扶持を稼ぐのに精一杯な甲斐性なしなので、デートやプレゼント、その他諸々に費やすほどの無駄な金はない。時も金なりだ。彼女と居る時間が有るぐらいならバイトでもした方がましだ、という考えが俺の行動を抑制しているかもしれない。それでも恋人に時間を割くことも惜しむような俺に、そんなものが出来るはずかないだろ。

「赤月君は何でそんなにしみったれなの？」

しみったれとかケチとか、散々言ってくれるものだ。ここは一つ、俺に対しての認識を修正させておこう。

「言つとくけど、俺はそれほど金に執着する性格じゃないぞ」

桃子が笑った。菩薩のような笑顔は全てを見通していると言わんばかりに。

「そんな真つ赤な嘘は付かなくても私は分かってるよ」

全然分かってねえよ。

「違う。俺は必要以上に物を惜しむ性質じゃない。こう見えても出し惜しみはしない主義だ。それでも、今の生活はギリギリ一杯なんだよ。それこそ一円の無駄さえ気にしてしまうほどにな。だからとても恋人を作る余裕は無い」

余裕以前にそんなものつくろうという気さえ起こらない。興味がないと言い換えても良い。雑誌やテレビに映るような美人を見ても、俺の仲で何の感情も湧き上がらない。本来、今俺はそういう物事に盛り上がる年頃のはずだ。実際教室内でもそのての話で盛り上がっている奴らがいる。だが俺はその事に何の関心も懷く事はなかった。

「赤月君は、一人暮らしよね？」

「ああ、そうだ」

「家事とかも全部一人でやってるんだよね？」

「まあな」

「偉い。そして凄い。一家に一つは欲しいよ」

桃子が下らない事をほざく。その一言に今まで活字に集中していた店長が口を挟んできた。

「赤月。もういつそのこと、ここの正規従業員になるか？」

「膨大な量の皿を一人で洗わせる様な店なんて、まっぴらゴメンだな」

それにこの店、これと言って抜きん出ているものが無いから、不況の波が押し寄せてきたら簡単に潰れそう。保護者が居ない俺を雇ってくれるのはこの店ぐらいで、それに関しては感謝もしてるしありがたい事だが、就職先としては些か不安がある。

「でもね。そんなに頑張ってるなら、きっと良い人が現れるって」

「何を根拠にそう言えるんだよ？」

「だって、赤月君口は悪いけど真面目で良い子じゃん。ルックスも悪くないからお買い得だと思うけど」

それはおだて過ぎやしないか？ それに、だからと言って性格の良い女が俺に絡んでくれるとは到底思えない。

それにね、と続けて桃子はくすくす笑いながら左の小指を立てた。
「運命の赤い糸、あると思うよ。私、運命はあるって信じてるから」

単純作業で疲れきった両手を揉みながら、俺は帰宅ルートに従って足を進めていた。

もう十分に夜間だというのに、人の気配と多彩な色の蛍光は夜を消す。静か、という単語を忘れた町は一瞬たりとも音を止まず事はない。

大通りは人が川のように流れて始終入れ替わりが激しい。俺もその流れに乗る。

右を向けばショッピングウィンドウで、左を向けば車体の群れが交差する。

窓越しに見る店のデジタル時計は、とうに十一時を切っていた。学生が町をうろつく時間じゃないな。

といっても、俺は校則を律儀に守るような優等生ではないので、あまり気にはしない。

「……ふあ」

欠伸が出た。

ここ最近の睡眠時間は削られてばかりだったのだが、流石に体は正直という事か。とにかく眠い。

ルート変更。俺は逸早く暖かい我が家へと帰るため脳内で最短ルートを検索する。路地裏を進み、工業区から直進する事で九分の短縮が可能と検索結果が出たので迷わず実行に移す事にした。

そこは、大通りとは打って変わって静か過ぎた。街頭の光だけが存在感を露にし、それ以外は深い闇に沈んでいた。

「……」

足音だけが響き渡る。この場に俺一人しかいない事を証明している。この道を通ったのは初めてではないが、今日はいつにも増して人の

気配が薄い。

人は一人になると恐怖を感じるらしい。頼れるもの、縋るもの、支えるものが無くなると自分に過大な自信がないと周りを恐れる。これは一種の防衛反応だと俺は思っている。

故に人気の少ないところを、意識的にしろ無意識にしろ避けるのだろう。

俺は数分前の店長との記憶を呼び起こす。

『赤月。もう遅いから車で送ってやろうか？』

『誰のせいだと思ってたんだ？ とうか遠慮する。必要ない』

『でもな、最近は物騒だぞ。殺人事件とか起きとるしな』

『誘拐の間違いだろ？』

『それは隣だ。お前は箱入り娘か何か？ 殺人事件はこの町で起きたんだぞ』

同じような事を言われるとは、俺はそこまで情報に疎いのか。真面目に新聞でも読む事を心掛けよう。

『で、送ろうか？』

店長が再度尋ねてくるのに対して、俺は手を振って拒否した。

『いらんいらん。殺人犯なんぞ簡単に現われやしない』

俺はそのまま送るぞ？ としつこく言ってくる店長を半ば無視して『スコール』を後にした。

……………にしても、殺人事件、ねえ。

故に皆表の大通りを歩く事を心掛けているのか。どうりでさっきから車一台たりともすれ違わないわけだ。

それに訊く所によると、それは約二週間前から発生し、今日までに被害者は四人にのぼるとか何とか。

倅杜がいる所では誘拐事件。おっと、世間じゃ神隠しだったっけか？で、俺の住んでる場所では殺人事件か。

ついでに言えば、あの時期と誘拐事件が最初に起こった時期が同じ

だ。

更に俺が高校に入学した時期、同じく倅杜と再会した時期、更に言えば殺人事件が発生した時期が重なるような気もしな事もない。よく言えば偶然。悪く言えば必然。

偶然であつてほしいぜ。と強く祈るが、これは決して杞憂なんかじゃないと思う。

俺は疫病神を背後霊にしてるし、倅杜は生まれもつての騒動請負人だからな。俺ら二人がそろって何も起こらないほうがおかしい。

これもきつとそれ、絶対それだ。

実際どんな事が起きるかと言えば、うーんとそうだな。

あまり良い例えは思いつかないが、まあ強いて例えるなら――

そこに死体があるぐらいか？

ピチャリ。かみ締めた地面の下で液体が跳ねる。

同時に錆のような臭い。

陳腐な表現だが、これが何を意味しているかわかっただろ？

ブロックベイに背を預けて腰を落としているそれは、物言わぬ肉人形と化している。人形だ。生前の人の原型を物の見事にぶち壊している。

目は刺して掻き混ぜられたように抉られ、耳は今にも削げ落ちそうに側面にぶら下がり、額は物の見事に陥没していて、果てに心臓は引き抜かれていた。

その無様を通り越して哀れな姿に涙ぐましいものを感じる。無駄と分かつちやいるが、俺はなんと声を掛けてみたくなった。

「もしもし死体さん、あなた様は何故そんな所で死んでいるのですか？」

返事はない。ただの屍のようだ。当たり前だが。

つかマジでエグイ。あまりの惨さに涙が出てきそうだぜ。

性格異常者が描いた、新生ムンクの叫び以上の最低傑作だ。これを

作品にして応募すれば審査員のゲロ付きの評価が返ってくるだろうよ。

まあ、そんな事は正直どうでもいい。この町で起こる殺人事件の五人目の被害者を最初の目撃者が俺とか、その遺体の人がしたとは思えない哀れもない姿とかは、さらさら全くどうでも良いんだ。

大事なのは……そうだな、これからの俺が如何すべきかだ。

警察に連絡なんて面倒くさいので却下。このまま知らず振りして立ち去るのもなんとなく気が引ける。しかし向こうから関ってくるというならそれなりの対処は心掛けよう。降りかかる火の粉は払うべきだ。

「なあ、そう思わないか？」

俺の声にピチャリ、という効果音で『それ』は返事を返してくれた。只今の俺の姿勢は直立不動中、死体は現在進行形で死んでます。それは第三者であり、俺の身近に存在する物でありもつとも嫌悪するもの。

ぴちぴちぴ、ピチャリ。

そらそら、俺が一年半保ってきた日常を壊すものが、足音を立てて遠慮も無しにやって来たぜ。

礼儀も何もあったものじゃない。まず身格好からして駄目駄目だ。現代に生まれたくせにジャングル育ちみたいに裸足だし、白いワイシャツをそんなに赤く染めちゃあ初対面の人に申し訳ないだろ。腕なんてボロボロじゃねえか、親から貰った体は大事にしるよ。そんな事を化け物に言った所で意味はないから、心の中で処理しておくけどな。

しかし、分かっていた事だがまことに残念極まりない。

俺がこのままの平穏を維持することは、人類が後百億年滅亡せず生き残れるぐらいの難易度だって事は熟知している。そういう風になっちまったからな。

『運命、あると思うよ』

じゃあこれも運命ですか？

「いやいや、違うよな？」

これは運命とか宿命とか、そういう星の下に生まれたとかのロマンチックが止まらないやつなんかじゃない。答えは単純かつ明確かつ簡単。

『呪い』という決して抜け出すことも抗うことも出来ず、退く事も止まる事さえも許されない暗闇の一本道。

例えよう。この一年半の俺の平穩は、その一本道に無造作に佇んであつた街頭による明かりのおかげ。決して漆黒の『呪い』から抜け出せたものじゃなかったんだ。

結局、街頭の明かりから離れていった俺は、元の暗闇の道に戻り、その発端のイベントが倅杜との再会だったんだ。

あーあ、短い幸せだったな。

こういうことを避けるために、誰にも引き取られなかったのに。「そう思うだろ？」

無言。無動。無反応。それはまだ活動しているがもう生きてすらないだろう。人としてなら、『化け物』はそこで黄昏てる死体と同じだ。

それでも、結局は動くけどな。

弾けた様に『化け物』が突進してきた。前置きなし準備なしの突発的な動き。

外見は人型だが、その動きは人を軽々と凌駕した異常なものだった。さながら獣か。たった三步でトップスピードに乗り、常人には残像だけが取り残される速度で俺に接近し弾丸のような拳を振るう。

人を確実に死に至らしめる猛威は、俺に届くことはなかった。

「おいおい、話し合いをしようぜ」

拳が俺に当たる前に、俺が先に『化け物』の喉に蹴りを叩き込んだからだ。

話し合い？ そんなのウソ嘘。する気なんてこれっぽちのお互いにねえよ。喉も潰したし無理になったからな。

化け物が吹っ飛んでいく。といつても数メートルをゴロゴロ転がっ

ていったただけだ。

それでも確実に致死的な衝撃。首から上が吹っ飛んでもおかしくない蹴りを食らって頭は健在となると、よほど頑丈に作られたのか。うんうん、製造者は余程のサディストと推測する。

それはどうでもいいか。結論から、『化け物』はその活動を停止させていなかった。

「まったく、タフだな」

ゆったりとした動作でだが、しっかりと踏ん張りながら健在を証明していた。ダメージなど皆無と言わんばかりに。

その堅実な姿勢に思わず拍手をしたいほどだ。

ファイティングポーズはとっていないが、続行させる気だろう。

あれを食らって立つとなると、きっと首の骨をへし折っても本当の死は訪れそうになさそうだ。

「めんどくさ」

面倒くさい面倒くさい面倒くさい面倒くさい。

何で俺がこんな事をやらなければいけないんだ？ 警察の仕事だろ

？ シャーマンとか裏事処理屋の仕事だろ？ その場に居合わせた

だけの俺が何で町の害虫駆除なんかに勤しまなくてはならないんだ

？ あーあーあー。あれもこれもそれも、全部が全部、倖杜のせい

だ。そういうことにしておこう。

まあいいさ。今度からこういう面倒くさい雰囲気の流れているところは極力避けよう。関らなければ幸せだと俺は信じてるぜ。

そろそろ体も温まってきたしな。こんな障害はさっさと踏み越えて、家で熟睡するしよう。

さーて、久しぶりに言ってみようか。

「熱を以って――」

腕を腰に添えて。

「――お前を穿とう」

突き出す。

はい、
終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0621g/>

かくて呪い子は世界を嘲笑する

2010年10月9日22時23分発行